

日本性科学会 ニュース

第25巻第4号

平成18年(2006年)12月

発行人:大川 玲子 印刷所:篠緑文社

2007年研修会・学会・研究会の開催予告

1. 第36回性治療研修会

日 時 2007年5月20日(日)

場 所 東京慈恵会医科大学西新橋校(東京)

※昼休みに、平成19年度日本性科学会総会を開催致します。

2. 第27回日本性科学学会/第9回性科学セミナー

第27回日本性科学学会/第9回性科学セミナーを下記のとおり予定しております。皆様奮って御参加下さいますようご案内申し上げます。

会 期 2007年11月10日(土) 13:00~17:00 第9回性科学セミナー

11月11日(日) 9:00~17:00 第27回日本性科学学会学術集会

会 場 千葉市民会館(JR千葉駅から徒歩7分)

千葉市中央区要町1-1 Tel:043-224-2431

学会長 高波真佐治(東邦大学医療センター佐倉病院泌尿器科)

メインテーマ 「ヒトの性行動を考える」

一般演題締切 2007年6月30日

400字以内の要旨をe-mailにて下記宛にお送り下さい。

e-mailアドレス: masaharu@sakura.med.toho-u.ac.jp

[お問い合わせ先]

〒285-0841 千葉県佐倉市下志津564-1

東邦大学医療センター佐倉病院泌尿器科

Tel:043-462-8811 Fax:043-462-8820

3. 症例研究会

2007年の症例研究会の予定は次の様になっております。

1月19日(金) 堀口 貞夫先生

3月15日(木)・5月18日(金)・7月19日(木)にも開催を予定しております。

時 間 6:30~8:30pm

場 所 日本性科学会事務局

Vol. 25

日本性科学会

〒107-0062 東京都港区南青山1-1-1 新青山ビル西館3F

No.
4

長谷クリニック内

TEL 03(3475)1780 FAX 03(3475)1789

[症例研究会から]

9月に行われた心理臨床学会大会で日本性科学会会員の荒木乳根子、金子和子、佐々木掌子、渡辺景子の4人で「性に関して臨床心理士にできること」というテーマで自主シンポジウムを行いました。4人が以下の話題提供を行いました。すなわち、「思春期に関して」(渡辺)、「成人、性機能障害に関して」(金子)、「高齢者とケアに関して」(荒木)、「性的マイノリティ・性同一性障害に関して」(佐々木)です。

参加者に対して行ったアンケートによると、参加者は、教育、福祉、医療、開業、と多くの分野にわたり、性に関して多方面から語られたことに対して、性の持つ意味、重要性がよくわかったとの肯定的な感想、意見が圧倒的でした。また、参加者の中に、大学院生も多く、若い方の中に、性を心理の世界で取り入れていくことに対して積極的な姿勢が見られ嬉しいことでした。

「性にかかわる仕事をするものが出来ること」という観点から、バックグラウンドが心理でない方たちとも考える場を持ちたいと、この症例研究会で渡辺景子氏に心理臨床学会で発表した「思春期に関して」を発表していただき、皆で話し合いました。

日本赤十字社医療センター 金子和子

「思春期に関して臨床心理士に出来ること」

日本性科学会カウンセリング室 渡辺景子

長年にわたる、児童相談所、日本性科学会カウンセリング室、スクールカウンセラーの経験から見て、性を主訴として自ら相談に訪れる子供は少ないと言える。しかし、一見性とは無関係の、不登校、食行動の問題、友人関係のトラブル、リストカット、身体症状、非行、等の主訴で訪れた子供たちの問題の中に、性が原因であるもの、性の問題が絡んでいるものが少なくなく、また、面接の経過で、性の問題が生じてくることもある。たとえば、不登校の子供の背景に、親の不和があり、不和の原因の一つに性の問題があることはそうしたことの一例である。

今回は、性の問題が表面に出ている場合を取り上げて以下に挙げる。

性被害：事例1. A子（中3） 中程度の知的障害があり、見知らぬ人から誘われてホテルについて行ってしまった。現在、性被害を受けたとの継続的サポート体制が十分でないのが現実である。性被害に対して、何が臨床心理士に出来るかを考えると、性被害を受けた子供へのサポート、性被害を与えた子供（大人）への対応は勿論重要であるが、親から、適切な対応をしてもらえないことが性被害の一因になっている子供が多いことから、親子関係にも目を向け、それを補う形、あるいは再構築を目指す援助が必要であろう。その意味で、性被害を受けた子供のみならず、その子の周辺全体をよく観察して、何が必要かを考えねばならない。

性的虐待：事例2. B子（中3） 不登校という形で始まり、登校するようになると、友人のものを隠すという問題行動が目立った。小学5年のときから、継父から性的行為を強要されていることが明らかになり、児童相談所の介入により、施設へ入った。

事例3. C子（中1） 実父による性的虐待を自ら相談した。児童相談所が介入し、一時保護を経て、祖父母宅へ預けられることになった。臨床心理士として、子供のサポート、性的虐待をした人のパートナー（この場合は実母）のサポートが必要になる。また、加害者が、告訴され有罪判決を受けない限り、専門的治療が義務付けられていないこと、そのプログラムがないことが大きな問題であると痛感する。

障害児と性：事例4. D男（中2） 軽度の知的障害、癲癇あり。女子の後についていく、女性の髪、体に触れる等の問題行動がある。臨床心理士としては、教師と連携して、発達の側面から、教育の仕方を援助する。

性同一性障害（？）：事例5. E子（小3） 不登校。性同一性障害ではないかと、母親が不安になっている。その根拠として、胸のふくらみを嫌がる、スカートをはきたがらない、男の子の遊び方を好む、等である。相談を受けた教師は、性同一性障害であるかどうかの判定を下そうとしていた。臨床心理士としては、担任教師と話し合い、「流行病」の性同一性障害を作らないようにし、安易に判断せず、親の不安に対しては、サポートしつつ、専門家を紹介することが必要との合意を得た。

このように、見えてくると、現場では、臨床心理士のみで出来ることは限りがあり、臨床心理士は、教師、親、医師たちと連絡を取り合って、子供、親たちを保護し、支持していくことが重要であることが明瞭になってくる。また、教師に対しても、起きていることの意味を説明し、対応の仕方を援助することも重要である。

研究会参加者から、家族による性的虐待は、保護すべき親からも意図的に見逃され、表面化せず、問題の解決が困難であることがしばしばみられる、との指摘があった。また、学校現場での教師によるセクハラの多さ、それに対するしっかりとした規制や監視のシステムの欠如、監督者の問題意識の無さ等が述べられた。さらに、医師として、発見した（と思われる）性的虐待は児童相談所に報告し、児童の発達を損なわないよう配慮することの必要性が述べられた。

第9回アジア・オセアニア性科学学会報告

東京大学大学院医学系研究科博士課程 井ノ口 珠 喜

第9回アジア・オセアニア性科学学会（9th Asia Oceania Congress of Sexology）が2006年11月1日～4日、タイのバンコクで開催された。今回の開催地であるバンコクは、チャオプラヤー川の東岸に位置し、宗教・政治・経済・文化・教育など、タイ王国を支え発展させるすべての面での中心地である。大会開催直前に起きたクーデターの影響も心配されたが、現地では混乱の様子は一切見受けられず、「微笑みの国」タイという印象は変わらなかった。

第9回となった本大会のテーマは“Sexuality No East No West”とされ、アジア、オセアニア地域に加え、欧米諸国からの参加者も割合多く見受けられた。しかし、参加者数は演者も含めて約100人と意外にも少なかった。プログラムは1日目にワークショップ、2～4日目には12の講演、6のシンポジウム、34（口頭：26題、ポスター：8題）の一般演題で構成された小規模な大会となった。シンポジウムでは開催国であるタイよりも、日本からの参加者の活躍の方が目立っていた。高橋都先生の「がん患者の性の健康に対する医療従事者の支援のあり方」の講演に始まり、「性別変更をした日本の性同一性障害者の臨床的特徴」針間克己先生、「婦人科学的知見による陰挿入障害」大川玲子先生、「テストステロン抑制うつ気分改善治療としてのホルモン療法」野末源一先生らがシンポジウムを盛り上げた。

講演は、G. Adaikan氏（シンガポール）、L. Gooren氏（ニュージーランド）、E. M. L. Ng氏（香港）、V. Kulkarni氏（インド）らによる男性性機能障害の治療方法や成績に関する講演が例年通り最も多かった。女性性機能に関しては、B. Whipple氏が講演の中で、ICD-10やDSM-4では性的快感（sexual pleasure）や性的満足（sexual satisfaction）が診断基準として挙げられていないが、女性にとっては性的な快感や満足を得られることが非常に大きな意味をもつことを強調していた。そして、研究者、臨床家が今後普遍的に性的快感・満足を女性の性機能の構成要素として位置づけることを提案した。ディスカッションに入ると、フロアに対し賛否の挙手を問う参加型のセッションとなった。結果としては、賛成派が5割、反対派が1割といったところで、すぐには結論が出せないといった空気が流れていた。これまで性機能といつても男性の性機能、それも生理学的な側面や治療といったハード面に関する議論が多くあったが、ようやく女性の性機能に、そして主観的な満足感といったソフト面の議論が進みつつあるようだ。今後の議論の行方が非常に楽しみである。

最もタイらしさを感じさせたのが、「性転換手術における文化社会的展望（Sociocultural perspectives of Sex Change Operation）」と題されたシンポジウムであった。性転換手術のメカニズムとされているタイを拠点に、東南アジア地域のトランスセクシュアルに対する支援活動を行うNPO団体「Southeast Asia Consortium on Gender, Sexuality and Health」のメンバー4名によるパネルディスカッションであった。団体メンバーの大半がMTF（Male to Female）である。パネリストが語った言葉をいくつか挙げると、「世間は私たちをトランスジェンダーとしてしか見てくれない。私はトランスジェンダーとしてではなく、女性としてみてほしい。」「差別がなくなってほしい。就職も限られたものしかない。」「IDの性別も変えられるようになってほしい。病院で保険証を出したらびっくりされる。」「昨日の（針間先生の）発表によると日本でも法的性別が変えられるようになったそうだ。タイでも変えられるようになってほしい。」といったものが多く、当事者が抱える悩みや議論の中身も含めて、日本とそう変わらない状況であった。性転換手術をして外見を変えられれば全て問題が解決するというのではなく、トランスジェンダーやトランスセクシュアルが一人の人間として、そして一人の男性あるいは女性として、他者からも受け入れられる社会が望まれると強く訴えている様子が印象的だった。今大会はこのシンポジウムに象徴されるように、他のシンポジウムや一般演題においても、トランスセクシュアルやホモセクシュアルなど、性自認や性指向に関するテーマが前例にないほど多く取り上げられており、性科学分野におけるこれらのテーマの重要性を改めて実感した。今後は、医療技術の進展や法整備が進んだ社会において、彼らがより Well-being でいられるための支援に関する議論の展開が期待される。



シンポジウムのパネリストを務めたMTFの方々



帰りの空港にて

第18回性の健康世界学会（WAS）（2007年4月15日～19日）参加のおさそい

日本性科学会理事長 大川玲子

場所：オーストラリア；シドニー（シドニーコンベンション&エクシビション・センター）

テーマ：Achieving Health, Pleasure and Respect（性の健康、喜びと尊敬を求めて）

「性の健康世界学会」と名称変更してから最初の学会です。日本の4月は学校、職場の年度初めですが、オーストラリアはアジア・オセアニア地域学会の仲間でもあり、日本からの多数の参加が期待されています。性の健康を求める世界中の人々と交流しませんか。季節は秋、日本との時差はありません。

日本性科学連合（JFS）で学会ツアーを企画しました。日本性科学会ないし、JFS事務局（日本性教育協会内）に御連絡下さい。個人の早期登録は終了しましたが、団体ではまだ大丈夫です。また抄録受付も一旦終了しましたが、12月18日から4週間、再受付けするそうです。抄録投稿はホームページからオンライン投稿して下さい。ポスター発表もあります。<http://www.sexo-sydney-2007.com/>

近畿性科学研究会を終えて

大阪市立大学大学院医学研究科 森村美奈

去る平成18年9月9日に大阪市立大学医学部学舎6階にて、近畿性科学研究会（仮称）とファイザー株式会社の共催で、近畿性科学研究会が開催されました。はじめての試みである今回は「パートナーとの性の問題」をテーマに、日本性科学会理事長であり独立行政法人国立病院機構千葉医療センター・産婦人科医長の大川玲子先生、当学会セラピストでいらっしゃいます岩佐クリニック・院長の岩佐厚先生をお招きし、ご講演いただきました。大川理事長には、「女性の性機能障害」と題しまして、性治療の基礎と最先端の情報をわかりやすくご講演いただきました。また岩佐先生には、「泌尿器科からみた夫婦の性機能障害」と題しまして、性治療におけるさまざまな問題とその対応につき、貴重な症例をご報告いただきました。さらに、それぞれのご講演に対し、地域で性治療に関わる先生方による活発な討論が行われました。皆様へのご連絡の遅れからご参加いただけなかった方には誠に申し訳ございませんでした。また、ご出席いただきました方々には運営の不手際にも関わりませず、多数お集まりいただきましたこと、心より御礼申し上げます。この会は、日本性科学会の近畿会員の方々から“性治療についての勉強の機会を”という声があがり、日本性科学会の諸先生方のご指導のもと大阪市立大学大学院医学研究科教授石河修が中心となり企画させていただきました。近畿圏には日本性科学会でご活躍の先生が多数いらっしゃることから、地域の特性を生かした“性治療”的な学習方法を検討することと、近畿地区の“性治療”に関するニーズについての把握を行うことも目的としました。先生方のご発表とご参加いただいた方々からのご意見などを参考に、今後はこの会を臨床症例検討会という位置づけで企画させていただくことを考えております。学会内外の先生方の症例提示と意見交換を、学会セラピスト／カウンセラーの方々のご指導のもとに展開していきたいと考えておりますので、どうぞ宜しくお願い申し上げます。そして近畿のみならず性治療に携わる先生方に広くご参加いただき、ご指導を賜ることによって、より有意義な研究会に発展することを願っております。

平成18年度資格認定結果報告

認定委員会委員長 阿部輝夫

日本性科学会「セックス・カウンセラー」「セックス・セラピスト」資格認定規定（日本性科学会雑誌に掲載）に基き、平成18年度の新規資格認定ならびに資格更新の手続きが行われました。厳正なる資格審査が行われ、その結果、資格認定更新において、セックス・カウンセラー2名、セックス・セラピスト2名が認定されました。

更新認定 セックス・カウンセラー
荒木乳根子・秋葉良子

セックス・セラピスト
塙田攻・秋葉良子

来年度も新規資格認定、並びに更新認定（2002年資格取得者が該当）の申請手続きが行われます。申請を希望される方は、日本性科学会雑誌掲載の資格認定規定並びに資格更新規定をご熟読の上、ご準備をお願い致します。特に、学術集会・研修会などにご出席の際の受講証・出席証は、必ず保管してください。

申請の詳細は、2007年6月発行のニュースに掲載されます。